

万葉集雜記

(一)

吉 永 登

一 あはにな降りそ

和銅元年の六月、但馬皇女がなくなった時、異母兄の穗積皇子が悼んで作った歌がある。それは

降る雪は安播にな降りそ吉隠の猪養の岡の寒からまくに (巻

二、二〇三)

という歌であるが、この第二句の「安播」には在来何かと問題があった。

万葉集注釈は、1 淡とするもの、2 佐播の誤りとするもの、3 深雪の方言であるとするもの、4 地名とするもの、5 アハはサハと同じであるとするもの、の五説をあげた上、第5説がよいとしている。

この第5説は岩波の日本古典文学大系本に

あはに——たくさんに。サハニと同じ。このようにサ行の頭子音の有無によって二つの類似語を形作る例には、助詞のイと助詞のシ、植エル意のウウとスウ、棄テルの意のウツとスツなどがある。

といっているのが、要領を得ているといえよう。たしかに一つの考えを示すものであるが、他に考え方はないものであるうか。

a 母音をもつ首節から出来ている言葉の、その a 母音がそっくり a 母音に更替しても、意味がほとんど変わらないものが少なからずある。例えば

○ハダラ：ホドロ

夜を寒み朝戸を開き出で見れば庭も薄太良に三雪降りたり云

庭も保籽呂に雪ぞ降りたる (巻十、二三二一八)

吾背子を今か今かと出で見れば沫雪降り庭も保籽呂に (巻十、二三三三三)

○タナグモリ：トノグモリ

隠口の 初瀬の国に さよばひに 我が来れば 棚曇利 雪は

降り来…… (巻十三、三三三二〇)

……心には 思ひほこりて ゑまひつつ 渡るあひだに たぶ
れたる 醜つ翁の ことだにも 我には告げず 等乃具母利
雨の降る日を…… (巻十七、四〇一一)

○タワワ：トヲヲ

足引の山道も知らず白樫の枝も等乎々に雪の降れば多
和々々(卷十、二二一五)

タワワの例はないが、或云の「多和々々」はタワタワと読むべきかとも思うが、イトイトがイトドとなるようにやがてタワ(タ)ワとなる言葉ではないかとも思う。何れにしても万葉集以後にはこのタワワの語の存在することはいうまでもない。一例だけをあげることにすると

折りて見ば落ちぞしぬべき秋秋の枝もたわわに置ける白露(古今集卷四)

などがある。

右のような母音交替の現象が認められるとすれば、問題の「アハもオホとして考へることも出来ない」ところで、オホであるが、万葉集では

我が大君天知らさむと思はねば於保にぞ見けるわづかそま山

(卷三、四七六)

など、今日のオホヨソに通じるものがかなりある外は、

夏影の妻屏の下に衣断つわぎも更まけて我がため断たばやや大に断て(卷七、一二七八)

があるだけである。このオホはいうまでもなく広さであつて、これ
で問題の量に関する「アハ」を解決することは困難であらう。しかし、
広さと量とは後には区別されても古くは区別されなかつたとも考へ

られ、しかもオホを語幹とする形容詞オホシは、量をも形容することであるから、その語幹オホが、其の大を意味することはあり得ないことではない。現に熟語としての大雪のオホは分量の大を意味するものであらう。

とにかく一つの解として考慮されてもよいのではなからうか。

二 あざむく再論

わたしは、かつて「美夫君志」の創刊号に、山上憶良が古日の死を悼んだ長歌の反歌と思われ

布施おきて我は乞ひ祈む阿射無加ずただに率行きて天路しらし
め(卷五、九〇六)

の歌に関する小見を発表したことがある。それは、このアザムクは在来無反省にタマス^のの意に訳されていたが、軽蔑スルという意のあることから、そのように解する方がよいのではないかということであつた。その理由として、わたしは

1 アザムクには今日でも、文語の世界では、露玉ヲアザムクとか、屏ヲアザムク明ルサなどと用いられることがあつて、それらがかつて軽蔑スルとか、問題ニシナイなどという意に用いられた名残を示すものようであること。

2 「近江に遷都す。この時、天下の百姓遷ることを願はず。諷諫者多し」(天智紀、「諷諫」には直接軽蔑の意はないが、全体と

して馬鹿ニシテアテコスルという意が感ぜられよう。「少年に左右なく恥辱を与へられけるこそ遺恨の次第なれ。かかることよりして人にはあざむかるるぞ。」(平家物語、殿下乗合)など古代中世を通じて、ダマスの意の外に輕蔑スル意に用いられていることなどをあげたのであった。

もっとも在米のようにダマスと解しても、またわたしのように輕蔑スルと解しても一応意味は通じるので断言することはひかえることにした。しかし、今でも

お布施を置いてわたしはお願ひします。うそをいわないで、まっすぐに連れて行って、天へ行く路を教えてください。(武田祐吉、増訂万葉集注釈五、五八二頁)

布施をおいてわたしはお願ひします。(子供だと)あなどらないで、まっすぐに連れて行って……

の二つを較べる時、我田引水ではないが、後者の解にひかれるものがある。その際もいったのであるが、第一、「うそをいわないで」とか「だまさないで」など頼む方の言葉としては不穏当で、うっかりすると相手の自尊心を傷つけないでもない。

ところで、最近に出た小島憲之氏の「上代日本文学と中国文学中巻」は、このアザムクに触れて、誘うの意であるという新説を出している。わたしの説がしりぞけられたからいいうのではないが、これは明らかに間違っているようで、それが岩波書店の日本古典文学全

集の万葉集にも採用せられている説であつてみれば、やはり此の際はつきりさせておくのが義務ではないかとも考へる。

氏は、私見の一つの論拠ともなつた遊仙窟の「鬢欺 鬚鬢非 是 鬢」に見える「欺」を、普通のダマスの意で、慶安版の「欺、凌輕也」という注は誤りであるといっている。実をいうと、わたしは漢字に違つた二つの意味がある場合、偶然であろうか、日本語にも併行して二つの意味のあることがある。その例にこの遊仙窟の古訓を取り上げたのであつて、「欺」にダマスと「凌輕」すなわち輕蔑スル意との二つがあるように、日本語のアザムクにもダマスと輕蔑スルとの二つの意味があると推定したのであつた。したがつて漢字の意味の一方が否定せられても、憶良の用いたアザムクの意に關する推定は動かないのであるが、この氏の考へにしてからが、わたしは誤解であると考えた。

わたしは、前引遊仙窟の一節を慶安版の注に従つて、

十娘の鬢は、(もつとも美しいとせられる) 顰の羽のような鬢をすら輕蔑するほど美しい

と解したのであつた。しかるに、もしこの「欺」を普通のダマスであるとして解したなら、全体をどのように理解すべきであらうか。氏はこうした場合、よく対句に目をつけて、そこから解釈を引出すという極めて手堅い方法を用いている。遊仙窟では前引に引つづいて、十娘の眉の美しさをたたえて、「眉 映 蛾眉非 是 眉」といるのであ

るが、この「咲」は笑ウの意で、蛾眉ナンカ十娘ノ眉ノ美シサニ較べルト問題ニナラナイトセラ笑ウことなのである。したがって、この「咲」に対する「欺」を慶安版の注「欺凌軽也」を無視して、普通のダマスであると断ずるのはその理由がわからない。わたしの不思議に思うところである。

次に本論に入ることにする。氏はアザムクが古くは誘ウの意に用いられた証拠として、文選の

誘アザムク我松桂、欺アザムク我雲壑（北山移文）

に見える「誘」の古訓アザムクを取り上げている。しかしこれは氏の誤解以外の何物でもない。慶安版蓬仙窟の注を当らないとしてしりぞけている氏が、この場合寛文版文選の注「済曰、誘謂引誘」を信じているのもわたしには不思議である。これも対句に目をつければ、「誘」が「欺」に対しては明らかで、したがって「誘」に「欺」に共通した意味があったかどうかの吟味こそ何より必要であつたはずである。

大漢和辞典を見ると

誘……チ、まどはす〔淮南子、精神訓〕不レ誘ニ於人一〔注〕誘猶レ惑リ、……誘誑也。ヌ、……誘巧詐也。

とあって、「誘」にダマスの意のあつたことが知られる。つまり文選の「誘」も実はこのダマスの意で用いられているのであって、こうした配意を氏は欠いているようである。まして氏自身「古い伝統

の訓を含む」という日本書紀の古訓に「誰神徒誘アザムク朕」（仲哀紀八年）「独有ラコツル誘アザムク宰之情」（神功撰政前紀）等、たとえ「誘」にアザムクアザムクの訓が見出されたとしても、前後の関係から考えてダマスの意に用いられていることは明らかで、これをもってアザムクに誘ウの意があつたことは当らない。

乱にはミダレルの意味の外に、治・理に通じるオサメルという意味がある。今もし乱にヨサムの訓がついてあるからといって、乱の意味をミダレルのみと考えて逆にヨサムという日本語にミダレルという意味があつたとしたらどうなるであろうか。氏はこうした誤りをおかしているのではないだろうか。

アザムクに誘ウの意味があるということはわたしには絶対に信じられないことである。

三 藤原の御井再論

これも同じ号で論じたものである。わたしは藤原の御井の歌の末尾

……高知るや 天の御蔭 天知るや 日の御影の 水こそは
常ニにあらめ 御井のま清水（卷一、五二）

に見える「天の御蔭」「日の御影」に共通する「かげ」を通説が、御殿のかけと解しているのに対し、光もしくは姿の意であるとしたのであつた。すなわち通説の

……(高知也) 天ヲ蔽フ所ノ蔭(天知也) 日ノ光ヲ蔽フ蔭トシ
テ御住ヒ遊バス御所ノコノ水ハ……(万葉集全釈第一冊、六八
頁)

と解しているのに対し、今は顧みられない代匠記の

高キ天ノ影日ノ影モ移(映) ルナレバ天ノ久シキトモニ日ノ
ウセストトモトキハニスミタ、ヘテアラム……(契沖全集第一
巻、三三〇頁)

という解釈を復活すべきであると主張したのであった。もちろんこ
の結論に達するまでには、多分この成句の典故となったと思われる
祝詞の文章についても考えたことはいうまでもない。

単に一語の解釈の違いといってしまうそれまでであるが、実は
その違いこそかなり重大な影響があるのである。すなわち通説によ
ると、「藤原の御井」は殿舎の中にあることになるのであるが、わ
たしの考えというより契沖の考えに従うと露天にあることになるか
らである。わたしはそのことを特に強調して、浅い泉のようなもの
であると推定しておいたのであった。

昭和三十五年から、奈良県高市郡明日香村にある飛鳥寺の南方の
苑堀が始められている。次々と掘り出される柱の跡は、そこに千
数百年前、かなり大がかりな宮殿があったことを思わしめるものがある。場所から見て飛鳥板蓋の宮の跡でないかと主張する人もある
が、発掘を指揮した榎原考古学研究所の所長末永雅雄博士は、慎重

を期して結論を持ち越している。焼けたと伝えられる板蓋の宮であ
れば、当然灰が出てよきさうであるが、それらしいものが今のと
ころ見当らないからでもある。

何れにしてもかなり規模の大きい宮殿の跡であることに疑いはな
い。しかるにその発掘物の中に、すでに第一次調査で見当がつけら
れていて、三十八年度の調査で確認せられた井戸跡がある。外側の
溝の一辺十米に及ぶ四角に限られた中央に湧泉を持つすばらしい井
戸である。きれいな水がごく浅いところまで来ているので泉のよ
うであるという。しかもわたしにとって何よりも有難いことは露天
の井戸ではないかと思われることである。周囲には柱跡がない。も
ちろん井戸の中には柱を掘込まないで、おいただけの小屋掛け式の
ものもあるようであるが、ああした規模の大きいものにはどうであ
ろうか。暴風などに堪ええないことを考えればやはり露天と考える
ことが穏かなようである。藤原の宮より数代前であったにしても、
当時の宮殿の井戸が露天であったらしい、ということはその伝統を継
いだ藤原の宮の御井が露天であったと推定することを妨げない。

言葉の意味の追及から露天であるべきであると考えたわたしの結
論は、一つの傍証を得たように思うのであるが、どうであろうか。
注、万葉時代のカゲには、光・姿の外、ごく少数の地上に印する
陰の意があるが、日によって出来る物の陰を日ノカゲなどというこ
とはない。